

	口	𠂔	𠂔	艸	禾	辵	士	匕	一	教科書体(モリヤウ)
	因 よイン		員 イン	印 しイン	芋 いも	稻 いなねウ	逸 イツ	壹 イチ	弋 ひとツ	一 イツ
	/	/	/	/	/	/	/	/	/	甲骨文 ～前1046
	/	𠂔 陳煥同治	員 自文	印 毛公鼎	芋 戰國古璽	稻 曾伯遯	逸 季子	壹 戰國古璽	弋 散氏盤	金文 ～前221
	𠂔 泰山刻石	因 武成漢簡	員 漢文	印 居延漢簡	芋 居延漢簡	稻 馬王堆	逸 居延漢簡	壹 武成漢簡	弋 古文	説文解字 正字の元 前219頃を 100に著す
	𠂔 新居延簡	因 武成漢簡	員 居延漢簡	印 居延漢簡	芋 居延漢簡	稻 馬王堆	逸 居延漢簡	壹 武成漢簡	弋 古文	隷書肉筆 前206～ 68
	𠂔 西漢刻	因 白石神君碑	員 甘肅相殘碑	印 元嘉畫像石	芋 宋	稻 白石神君碑	逸 北海相景君碑	壹 史佚碑	弋 乙瑛碑	隷書石碑 148～186
	/	𠂔 王羲之	員 智永	印 宋	芋 宋	稻 王羲之	逸 王羲之	壹 智永	弋 王羲之	草書 317～ 主に王羲之
	/	𠂔 王羲之	員 唐太宗	印 王羲之	芋 梁	稻 蘇軾	逸 唐太宗	壹 宋	弋 王羲之	行書 317～ 主に王羲之
	𠂔 賈思伯碑	因 牛橛造像記	員 李陽銘	印 智永	芋 精進長	稻 文選	逸 虞翻	壹 馬休造像記	弋 牛橛造像記	北魏楷書 386～534
	𠂔 智永	因 歐陽詢	員 智永	印 精進長	芋 精進長	稻 文選	逸 歐陽詢	壹 歐陽詢	弋 歐陽詢	楷書唐 628～665
	/	因 五經文字	員 九經字樣	印 佛足石記	芋 佛足石記	稻 石經	逸 石經	壹 石經	弋 石經	正字唐 700頃～ 837
	𠂔 晋武帝	因 伊籍書	員 威合人村高志	印 佛足石記	芋 佛足石記	稻 最澄	逸 王初詩	壹 法隆寺法興 釋迦像光背記	弋 法隆寺法興 釋迦像光背記	上代日本 ～9世紀 平安初期を 含む
	𠂔 雲紙本明詠集	因 平賀四郎重 藤原色紙	員 藤原行成	印 小初造風	芋 秋名白粉	稻 上宮聖德法王帝 御筆	逸 近衛本朗詠集	壹 聖德太子	弋 元永本古今集	平安中期 10世紀～ 12世紀 和様の完成
	/	因 藤原行成	員 藤原行成	印 小初造風	芋 秋名白粉	稻 上宮聖德法王帝 御筆	逸 近衛本朗詠集	壹 聖德太子	弋 元永本古今集	江戸 1603～ 1868 庶民の文字
	/	因 藤原行成	員 藤原行成	印 小初造風	芋 秋名白粉	稻 上宮聖德法王帝 御筆	逸 近衛本朗詠集	壹 聖德太子	弋 元永本古今集	康熙字典 1716
	/	因 藤原行成	員 藤原行成	印 小初造風	芋 秋名白粉	稻 上宮聖德法王帝 御筆	逸 近衛本朗詠集	壹 聖德太子	弋 元永本古今集	文部省活字 1935
	/	因 藤原行成	員 藤原行成	印 小初造風	芋 秋名白粉	稻 上宮聖德法王帝 御筆	逸 近衛本朗詠集	壹 聖德太子	弋 元永本古今集	当用漢字 字体表 1949
	/	因 藤原行成	員 藤原行成	印 小初造風	芋 秋名白粉	稻 上宮聖德法王帝 御筆	逸 近衛本朗詠集	壹 聖德太子	弋 元永本古今集	簡体字 1964

【一(弋)】「弋」は説文にも康熙字典にも「一」の古文として載っている。それとは別に康熙字典では「弋」の一面からも引くことができる。

【壹(壹)】「壹」は「壹」の行書や草書からできた略字だ。「壹」の字体は説文にも康熙字典にも載っていない。中国

常用よりも日本の常用字の方が簡化されている例だ。説文では中に「吉」がある。しかも「吉よし」ではなく「吉よし」だと「亜」とも「豆」とも違う不思議な字体になる。

【逸(逸)】字源的にはこの字の旁は「兔」ではなく「兔うさぎ」。

説文、正字、康熙字典など正字の系統は旁に「兔」を書く。伝統的な字体では「兔」の点を省いて書き、すでに隷書の段階で点を失っている。文部省活字は「兔」ではなく「免」に点をつけた字体。当用漢字と常用漢字は「免」。中国常用は「兔」。正字では点ではなく横線になっている。江戸

では点のある字もある。康熙字典のしんによるは二点。【稻(稻)】「白」のパーツを「旧」に書くわけだが、単体の「白」はそのまま書く。「旧」は「舊・舊」の略字。

【芋】中国でも日本でもあまり使用例がない字。漢字を書くような特権階級はこの字を書くような文を書かなかつたのだろう。江戸になると使用例が増えるのは庶民が字を讀

み書きするようになったせいだとおもう。現在の中国では「薯」を書く。「芋」は長イモ、「薯」は丸つこいイモのことだ。そうだと。そういえば馬鈴薯は「薯」を書く。

【印】平安と江戸では咎とがなし点がつくことが多い。江戸に載せた字形は知らないといつても読めないかもしれない。

【員】字源は説文では貝に従う字としているが、加藤常賢も白川静も鼎に従う字としている。白川静によれば「口」は鼎を上から見た形で口の丸い鼎をあらわしている。円(圓)が丸をあらわすのはそのためだ。伝統的字体では「口」を「△」または「ム」で書く。太宗皇帝でさえ正字の字体は書いていない。

【因】泰山刻石と比べると説文の字体は小篆というより金文に近い。こういうのが説文をもうひとつ信じ切れないところだ。もっとも説文の原本はないのだけれど。四角で囲まれた中の「大」の右払いが少しでも書道をやった人から見ればありえない書き方だ。中国常用では止めている。四角の中の「大」はどうも格好が悪くていろいろ工夫したのだろう。「大」を一八〇度開脚したものが「土」になり、それが「工、ユ、コ」に変化したのだろう。

